

金剛力士像（木造金剛力士立像）

国宝

これらの像は金剛力士像である。仏教における戦士の神であり、雷を象徴するインドの武器、バジュラを操る。鎌倉時代（1185～1333年）の初期に慶派と呼ばれる仏師集団によってつくられた、写実的な傑作である。12世紀と13世紀の日本の仏像に特徴的な、写実的な描写とドラマチックな動き、そして力強さが見られる傑作である。はめこまれた水晶の目、風にたなびく衣、ふくらんだ筋肉、そして浮き出た血管が、生き生きとした外観をさらに強調している。

左側の像は口を大きく開き、「阿」の音を象徴している。サンスクリット語のアルファベットの最初の音であり、哲学的には絶対の領域を表している。右側の像は口をしっかりと結び、「吽」の音を象徴している。これはサンスクリット語の最後の文字で、現象の領域を表す。これが合わさって、「阿吽」で万物の始まりと終わり、そして宇宙全体を象徴する。

金剛力士は仏教寺院で最もよく見られる守護者だが、奈良時代（710～794年）には寺院のお堂の中央の祭壇に設置されることもあった。この2体の像は、寄せ木造りでつくられており、もともとは興福寺の西金堂に祀られていた。1180年に火災で西金堂が焼失した際に焼け落ちた奈良時代の像の代替としてつくられたものである。